ＫＳＫＳ（ＦＲＥＥＤＯＭ　No75）第三種郵便物認可　通巻2685号　2008年7月10日発行

KSKS

FREEDOM

薬物依存症からの回復支援

フリーダムニュース
NO.75
年間購読料２０００円
編集
フリーダム
06-6320-1463

写真：倉田めば

二〇〇〇年十二月十二日　第三種郵便物認可　毎日発行

CONTENTS

■座談会　刑務所での「離脱教育」に携わって
大阪ダルク・スタッフ
■ダルクのなかま
■アンダーソンの物語　ＰＡＲＴ９

刑務所「離脱教育」に関わって

広がる、出会い

各地の刑務所や少年院の「薬物離脱教育」にダルクのスタッフが協力を始めて約二年が経ちました。実際に刑務所内でのプログラムを続けてみて、スタッフたちは「手ごたえ」を感じているのでしょうか？
大阪ダルクのスタッフ（非常勤も含む）で、「離脱教育」に関わっている人たちが集まり座談会を開きました。司会は本誌の編集長が務めました。

□司会
どのくらいの頻度で「離脱教育」に関わっておられますか？

■竹内
僕は地元の大阪刑務所だけです。半年に６回くらいで、釈放前の教育ではなく、収監中の教育の一部を受け持っているものです。一こまは一時間で、２こまを使ってグループワークをします。

■倉田ちえ
山陽地方にある刑務所に月に２回。初犯と累犯のグループを受け持ちます。また近畿圏の刑務所に月に２回。また少年刑務所にも月に１回行きます。

■寺井
僕は地元の大阪刑務所のほかに、医療刑務所や少年刑務所にも行きます。あわせて月に３回は刑務所での教育に従事することになります。

■倉田めば
私は大阪刑務所に月に２回。少年刑務所に１回。また少年院での講演会に呼ばれることもあります。

□司会
そうすると大阪ダルクだけで月に十二日は誰かが刑務所等での教育にあたっているということになりますね。ダルクとしてはかなりの力を割いていることになりますが、効果は感じておられますか？

■倉田ちえ
出所してダルクに問い合わせてくる人が増えてきました。また離脱指導で出会った人がダルクにつながりだしています。「ダルクに行ったことあるけど良かったよ」という口コミが刑務所の中で広がると、もっと増えると思います。

■倉田めば
大阪刑務所だと薬物関連で収監されている受刑者の九人に一人くらいは「離脱教育」で私たちが出会っているのだと思います。これはけっこう高い割合だし、たくさんの人に出会える機会になっています。

□司会
実際の「教育」の場の雰囲気や様子を教えてください。

■竹内
初めはとても固い雰囲気です。でも、こちらがクスリを使っていたことなど体験を話すと受け入れられます。いつも最後には「ありがとう」と声をかけられ

るのが印象的です。

■倉田めば

ある刑務所では全部で８こまある離脱教育のうちの２こまをダルクが担当します。その他のこまは刑務所のスタッフの方が担当されています。回を重ねてグループの雰囲気が良くなっているといいのですが、そうでないと「ときほぐす」ところから始めなければいけません。

■寺井

初犯の人たちは話しやすい感じだけれど、真剣さには欠けます。「何とかなるだろう」という気持ちがあるようです。一方、累犯の人は心を開きにくいけれど、薬物も生活も大変だという感じが伝わってきます。

□司会

刑務所という特殊な環境の中では、なかなか本当のことを話しづらいのではないかと思います。ダルクやＮＡのプログラムは「正直になるプログラム」とよく聞きますが、このあたりの難しさはないのでしょうか？

■倉田ちえ

正直になるのは難しい場なので「正直になる」ことは求めません。最初の壁は「もうしません、やめます」という紋切り型の言葉です。これを崩すために依存症には進行の段階があることを説明し「あなたがあてはまるのはどこ」と問いかけます。また医療や関係機関について必要なときに活用できる知識を伝えるようにしています。大事なのは「みなさんのための時間」とはっきり伝え、何かを得てもらえるようにすることです。

■倉田めば

初犯の人はだいたい「出たらクスリをやる人には近づかない」といいます。「出たらダルクに行く」という人はあまりいません。私は、「いろんな道」があることを説明します。病院、ダルク、仕事などいろんな選択肢があることを知っておいてほしいのです。

■倉田ちえ

薬物について否定する人もいます。薬物以外のことで話をしたいんだと思います。虐待の経験を話し出した人がいましたが、多くの人に共通することで、あまり喋りすぎると「孤立の原因」にならないかと心配になったりします。

■倉田めば

とにかく興味を持ってもらうことが大事です。名前を聞いてくる人もいます。こういう人はダルクを訪ねてくるかも知れません。「あなたは男性ですか、女性ですか？」と聞いてくる人もいます。何でもいいから興味を持ってくれれば成功だと思います。

□司会

本格的に刑務所での教育に関わりだして二年くらいになりますが、刑務所のスタッフの人たちとの関係に変化はありましたか？

■倉田ちえ

刑務所の教育の人とは、いい関係が育ってきていると思います。刑務所の中で、刑務所の教育スタッフの方がやっている薬物依存離脱教育のグループについて相談を受けることもあります。受刑者から『あなたには薬物の体験がないでしょう』と言われるとへこんでしまうと教育の人たちはおっしゃいます。「もし、私がそのような言葉を誰かに言うときは、きっと自分の気持ちに共感してもらいたい時でしょうね」と教育の人たちに説明すると、『あなたには薬物の体験がないでしょう』という言葉は、決して教育の人たちを攻撃したり非難したりしているわけではないということに、気づいていただけるようです。

また刑務所のスタッフに私を通して薬物依存症の女性の回復のイメージが伝わればいいと思っています。

□司会
離脱指導に関わって生まれてきた変化やこれからの課題があったら教えてください。

■竹内
外で会えることがあります。ＮＡで会うと、相手はよく覚えてくれていて声をかけてくれます。

■倉田ちえ
ダルクに来るかどうかではなく、「出会う」ことが大切です。刑務所での教育が「出会う」場になっていることが第一の変化ではないでしょうか？

■倉田めば
今は、大きな網を投げている、種まきをしている段階だと思っています。何年後に実を結ぶか分からないけれど。関西でＮＡがはじまったころもそうでした。あちこちの病院に行き、話しをしたが誰も来なかった。でもその種まきがあったから、ＮＡは大きく育っている。

■倉田ちえ
年にひとりでも二人でもいいから、ダルクで直接、刑務所から受け入れ、社会復帰への道をつくる。そういうシステムをつくれればいいと思う。

■倉田めば
小さな保護会のような役割を果たすということだね。

□司会
いろいろと貴重なお話をありがとうございました。話題は尽きませんがこのあたりで座談会を終えさせていただきます。

編集後記

▼今年は**大阪ダルク開設十五周年**にあたります。杉本町の大和川のほとりの小さな民家からのスタートでした。十五年たっても、財政面をはじめ課題はいっぱいです。でも、施設としての成長はさておき、ダルクから巣立っていった仲間たち、ダルクを支えてくださる支援のネットワークは確実に広がりました。十一月八日（土）には、「十五周年のつどい」（仮題）を予定しています。詳細は後日、お知らせいたしますが、スケジュール帳にメモをお願いします。

▼前号でお知らせした**生活保護の移送費問題**は、まだ解決を見ていません。厚労省は生活扶助の中に交通費も含まれている、という新解釈を主張し、通院交通費が高額の場合にのみ支給する、高額かどうかは各自治体レベルの判断とする、としています。この考え方からすると通院交通費だけではなく、自助グループ参加の交通費も支給しないという決定も可能になります。事実、そのような事例が起こっているという報告が届きました。▼移送費問題は与党議員の中にも「新通知は撤回すべき」と考える人もいて、事態はまだ流動的です。しかし通院や自助グループ参加の交通費は、薬物依存からの回復のための命綱です。不支給決定が出されることがあれば、審査請求など法的な対応をとる必要があります。フリーダムでは不支給決定に対する法的な争訟に関する支援を行います。「交通費が出なかった」という場合はフリーダムまでご連絡ください。

薬物体験を輝かせて

大阪ダルク　B

自分の世界でシンナー

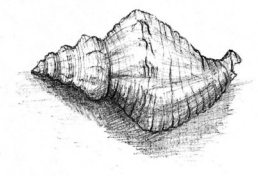
私は現在３９歳ですが、初めての薬物使用は１４歳です。最初はシンナーでした。もともと興味があったわけではありませんでしたが、周りの仲間が吸引していて、自分だけ吸わないわけにはいかなかったのです。家族や家庭に対し、安心できる場所がないとも感じていました。もともと私は親との間に壁があって、自分を認めてくれない、否定されていると思っていました。それでも最初は親と話をしていましたが、中学生ぐらいになると、もう話にならないなあと思い、言葉すら発せず自分の世界に入るようになりました。

当時は若い子の間でシンナーが流行っていました。自転車のパンク修理用の薬剤を使ったり、塗装屋からシンナーを盗んできたりしました。シンナーはみんなで吸引していました。自分はシンナーを吸うと凶暴になって、人をどついたりしていました。幻覚も体験しましたが、時々言われるように「望む幻覚がそのまま現れる。」というようなことはなかったですね。

そんな感じで１６歳ころまでシンナーを吸っていました。結構うまく吸っていたので親にも見つからず、警察にも捕まらず、処分を受けることもありませんでした。ところが、１６歳ころになって、Ｇ１０（ジーテン）というボンド類を吸引したところ、変な幻覚や体の不調が現れ、これはヤバイと怖くなって「ちょっとやめとこう。」と思いました。その頃になると、周囲の友人もぼつぼつシンナーをやめていましたね。仕事に就いたりして中学時代の仲間も分散していきました。

中卒後は、鉄工所で働いていました。結構まじめにやっていたと思います。家業だけは継ぎたくないと思って意地になっていました。朝までシンナーを吸っていても仕事にだけはきちんと行く。ある意味「良い子」でした。

１７歳でマリファナを体験しました。今から２０年前の話ですから、今ほどポピュラーなものではありません。１７歳ではなかなか入手できなかったのですが、他人とは違うものをやっているという優越感がありました。先輩でヤクザをしている人から売って貰っていました。マリファナは食欲を増進させる作用があり、朗らかになりました。全体的にはダウナー系なのですが、一点だけ集中できる感覚があって、音楽などに集中できま



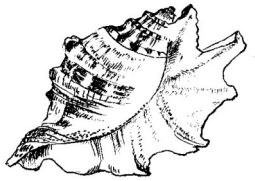
した。ジョイントというタバコ式のものや、キセルパイプを使って吸引していました。シンナーとは違う快感がありました。当時自分はサーフィンをやっていて、サーファー仲間ではマリファナはファッション感覚で広まっていました。マリファナにはあまりアンダーグラウンドなイメージはありませんでしたね。ただ、他のサーファー仲間に比べて、自分は薬物に対して「卑しい」と感じていました。他の人が我慢できても自分は我慢できない。今にして思えば依存の度合いが深かったのだと思います。おかしいなとは感じていました。それでも、逮捕されることがなかったので、薬物のマイナス要因を実感することはありませんでした。でも、今にして思えば、シラフで生きる時間を失い、人間的な成長の機会を失ったと思います。マリファナでは幻覚は体験せず、ただ楽しく使用していたため、やめるきっかけを失っていました。中学校で受けた「だめ。ゼッタイ」の教育が残っていて、覚せい剤は怖いけどマリファナは安全やと思っていたのです。

覚せい剤を始めて

２２歳で覚せい剤を覚えると、マリファナから覚せい剤に移行しました。当時自分は中卒以降ずっと働いていた鉄工所を辞め、あんなに嫌だった家業を継ぐことにしました。「長男だから。」という思いがあったんですね。これが結構大変で、不安やストレス、メンタル的な弱さをカバーするために、家業を継いで３月後に覚せい剤に手を出しました。周りに「スピード」をやっている者がいて、これはスピードや、エスや、という感覚で手を出していました。シャブというアンダーグラウンドな感覚はなかったですね。実際に使っている友人から覚せい剤の話を聞き、半ば煽られるような感じで手を出しました。アップ系の薬物は初めてだったので劇的な体験をしました。アブリで使用しましたが、自分を取り戻すような感覚があり、精神的な不安が取り除かれるように思いました。それから、不安やストレスから逃れるために覚せい剤に頼るようになりました。覚せい剤を使用しながら家業をしましたが、だんだん耐性ができ、量も増えてきました。当時交際していた女性とセックスをする際に、快感を高めるために使用したりもしました。

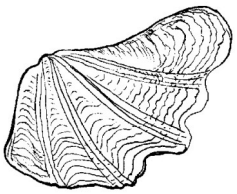
覚せい剤仲間との交際が始まり、覚せい剤を使っていない人とは付き合いが遠のきました。殆ど毎日、ひらすら使い続けました。のめりこむのが早かったのです。それでも処分を受けることはありませんでした。危ないことは何度もありました。売人のところに買いに行ったその現場に、３０分後に警察が踏み込んだり、所持している時に職務質問にあったり、自動車で事故を起こしたり、喧嘩になったりしました。覚せい剤を使用していると気分が高揚するし、切れてくるとイライラするので、刺激に敏感になっていました。家族はあまり気付かなかったと思います。

覚せい剤もマリファナ同様、良い部分ばかり体験していたので、やめるきっかけを掴むことができませんでした。それでも、覚せい剤代として最終的に五百万円の借金を抱え、人間関係も壊れました。配達を怠るなど仕事で穴を開け、家業の金に手をつけました。幻視はありませんでしたが、「捕まえにいくぞ。」というような幻聴がありましたし、被害妄想も出てきました。



先生との出会い

２９歳ころに、ついにお金が底をつきました。彼女に借金をしたり、家業の金に手を出して凌いでいましたが、親父もこんな自分を庇いきれず、ついに家業を首になりました。精神的に弱って、鬱っぽくなり、彼女と半同棲生活を送りながら、彼女の金も盗んでいました。そんな自分が嫌になりました。それでも覚せい剤をやめることはできませんでした。やめるための手立てや情報は自分のもとには入ってきませんでした。それでも、彼女がダルクの講演に出かけ倉田さんの話を聞き、倉田さんが当時大阪府立こころの健康総合センターにおられたＯ先生を紹介してくれました。ダルクの本も彼女が買ってきましたが、自分は全然読みませんでした。彼女は、自分を助けるために、警察に逮捕してほしいと相談にも行ったようです。当時は鬱から自殺願望も出ていました。将来への不安で一杯でした。その一方で、医療などの支援につながれば、もう覚せい剤を使えないという寂しさも感じていました。



Ｏ先生はそんな私の話を親身に聞いてくれました。安心できる雰囲気の中で話を聞いてもらうなかで、語ることの大切さを学びました。抗うつ剤や睡眠薬を処方してもらい、「これは欲求を止める薬やで」と暗示をかけられました。そんな薬は実際にはないはずですのにね。大阪府立こころの健康総合センターは、病院というよりは保健所のような感じの建物だったので、いわゆる精神科医療への敷居の高さは感じませんでした。

Ｏ先生に1月に1度お会いして、使用していないという報告をすることが楽しみでした。それでも、歯医者に行くといってはお金を不用意に持ってしまい、スリップしたこともあります。生活は親や彼女の援助で維持していました。当時の精神保健福祉法第３２条の適用を受け、医療費負担が軽減されていたのも、医療に継続的にかかることができる大きな要素でした。

ダルクについては、Ｏ先生のところにつながってから半年ぐらい経った時点で話が出たように思います。ダルクとＮＡ、いのちの電話の３つの支援があることを知らされました。Ｏ先生から勧められるタイミングもちょうどよかったと思います。当時は、実家で生活していくのが辛くて仕方ありませんでした。家族が家業を立て直そうとしているのに、自分はのんびり治療しているなんてと思っていました。居場所が欲しかったのです。

実はＯ先生から勧められる前にも1度ダルクに行ったことがあります。初めて行った時には、覚せい剤を使用して行きました。１０年以上やめている人がスタッフをしていましたが、素直に立派だとは思えず、社会の雰囲気と照らし合わせて、のんびりしているダルクの雰囲気にがっかりしました。もっときちんと自分を治してくれるものだと思っていました。治りたい、治してくれという気持ちで一杯になってしまい、ダルクから戻ってすぐに覚せい剤を使用してしまいました。そんな自分に腹が立ちました。

その後、ＮＡにつながりました。ＮＡはダルクとは違い、色々な人がいて、若い子や女性も多く、身近に感じました。１０数年も薬物をやめているダルクスタッフは自分にとって遠すぎる存在でしたが、ＮＡではクリーン半年とかそんな感じだったので、自分にも手が届くと感じました。「今日で覚せい剤を３日間やめています。」と話したところ、「３日もやめているなんて、えらいな。」と褒めてくれ

る人がいて、ああ話をわかってくれるなあと、当事者同士の支えあいを実感し、次に行く動機付けになりました。２回目にＮＡに行く時には、Ｏ先生が、「不安だろうから」と同行してくれました。忙しい時間を割いて、自分をメンバーに紹介してくれ、頼んだぞと言ってくれました。このことはとても嬉しく、今でも忘れません。援助者が社会資源をただ勧めるだけではなく、一緒に動いてつなげてくれるということは大きな意味を持つと思います。

ダルクにつながって

ＮＡは自分にとって大きな意味を持つようになりましたが、それでも１時間しか時間がありません。２４時間薬を使わないためにはどうしたらいいかとＮＡのメンバーに聞いたところ、ダルクを勧められました。この時もそのメンバーがダルクに連れて行ってくれました。時間を割いて手をとってつなぐような感じで連れて行ってくれたのは有難かったです。

こうしてダルクで薬物を使わない時間を積み重ね、生活を立て直すようになりました。実家でゴロゴロして過ごすよりも、ダルクやＮＡでプログラムをしている方がよいと感じるようになりました。先行く仲間に色々なことを話し、共に時間を過ごす体験は有効でした。１年後にスポンサーがつきあました。ダルクの雰囲気も、和気藹々としたものだと感じることができるようになり、中には薬物を使っている人もいるけれど、安心できるように感じました。

私は、医療の手当てによって精神的な症状に対応してもらい、ダルクやＮＡにつながることができました。保健所や福祉の関わりはありませんでした。それでも、地域の保健所に家族や当事者が相談に行くことはよくあると思います。ですから、保健師さんには、色々な情報を知っておいてほしいと思いますし、正確な情報を伝達するようにしてほしいです。実際にダルクやＮＡに足を運び、ミーティングの雰囲気を体験してほしいです。援助者が「どうせ回復なんてできない」と思っていると、当事者や家族に必ず伝わってしまいます。

医療や福祉の連携も課題です。それぞれの仕事のテリトリーに固執するあまり、制度に狭間に落ちてしまう人が多く見受けられます。そこに落ちてしまうことで再使用につながることもよくあります。どうか彼らをきちんとフォローしてほしいと思います。

適切な支援さえあれば、薬物依存症からの回復は可能です。私自身も、薬物を使用してきたという体験を腐らせず、輝かせるようなものにしたいと思い、拘置所へのメッセージ活動や刑務所での薬物依存離脱指導に取り組んでいます。

薬物依存電話相談

毎週土曜日　午後３時～７時

０６－６３２０－１１９６

薬物依存に苦しむ人のための相談窓口です。相談者の秘密は厳守します。相談内容に応じて、各種プログラムをご紹介します。

Ｐａｒｔ10

薬物依存症アンダーソンの物語

やっぱりＮＡや！

いつものように４ｔトラックで名古屋に荷物を運ぶ。加工された野菜の入った箱を満載していた。いつものルート、いつもの時間。いつもと違うのは僕の体に再び覚せい剤が入っていることだった。迷彩柄の作業服に編み上げ安全靴。白い手袋をはめて黒い帽子を深々とかぶり、サングラスとマスクをしてトラックを運転していた。「お前、何者やねん？」今なら自分でもツッコミをいれたくなるが、なんとか仕事だけは真面目にきっちりこなしていた。名神高速道路の岐阜羽島をすぎて一宮インターを出た。配送センターに荷物を届け、夕方六時頃その日の仕事が終わった。国道二十二号線を走り名古屋市丸の内にあるＮＡ会場に到着した。それまで自分を包み込んでいた得体の知れない恐怖感が「すーっと」なくなるように思えた。ミーティング中、僕の頭の中は騒がしくうるさかった。つまり、あらゆる考えがとめどなくあふれてくるのだ。それらの思考がすべて音になって頭の中で鳴り響く。自分の声や知り合いの声など。例えて言うと頭の中にラジカセが数十個あってそれらが頭の中で一斉に、勝手に音が出ている状態とでも言おうか。耳で聞こえるのではなく頭の中で思考が鳴っていた。でもミーティングでは発言もせず一時間半の間じっと椅子に座っていた。そしてミーティングが終わった。すると今度は耳から、ありのままの音がはっきり聞こえた。ある仲間に「素晴らしいね、大阪からトラックで来るなんて」僕は嬉しくなって、「ありがとう」と言いながらその仲間に握手を求めた。そしたらハグしてくれた。

次の瞬間、僕の胸の奥から「ぐーっと」何か押し寄せるものがあり、「じわーっと」目頭が熱くなって涙が出てきた。どこか「ほーっと」安心したことと仲間のあたたかい気持ちにふれた喜び。ものすごくうれしかった。ほどなくしてミーティング場をあとにした。名城公園の横あたりで信号待ちをしていたら、僕が運転するトラックの横に一台の乗用車が止まった「おーい、アンダーソン！」その車の助手席越しに仲間が僕を呼んだ。思わず僕は「さっきはありがとう！」と返事した。すると仲間は「ミーティング場の椅子でアンダーソンの座る席はいつでもあるから、よかったらまたおいでよ！」そう言ってくれた。僕はまた目頭が熱くなって涙があふれた。「仲間っていいなぁ・・・今日ミーティングに参加して、ほんまに良かった・・・なんだかすごく嬉しい・・・」涙を「ぼろぼろ」流しながら、その感動の

余韻を大切に大阪へ向けてトラックを走らせた。

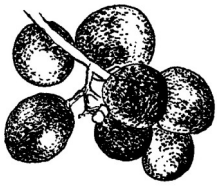
妄想自問答

一宮インターから名神高速に乗る時、気分よく「ニコニコ」一人笑っていた。入口ゲートの通行券を取る時は機械の「ツウコウケンヲオトリクダサイ」という案内に「ありがとう」と言葉を返していた。養老パーキングエリアを過ぎて「ルンルン」気分でトラックを運転していた。関ヶ原あたりにさしかかった時「なにをニコニコ笑ってる？」と言う声をテレパシーのように頭の中でキャッチした。僕はテレパシーで返答した。「仲間が僕を褒めてくれたんや。トラックで大阪から名古屋のミーティングに出るのは素晴らしい。そう言ってくれたんや」「・・・」相手から返答がない。僕はまたテレパシーで問い返してみた「あんた誰やねん？」「・・・」返答がない。今度は少しムキニなって問いかけてみた。「ちゃんと返事せえや！」それでも返答がなかった。「まあええ」僕はそう思いながらその事を諦めるように相手を無視しようとした。草津をすぎて大津、そして京都東インターチェンジで高速を出た。国道一号線を京都市内に向けてトラックを走らせていた時、ふと思った。「トラックの荷台に誰か乗ってるんやないか？」その時僕が運転していたトラックは冷凍車で荷台はアルミパネルのコンテナのようになっていた。「そうか・・・後ろに誰か乗っているに違いない・・・」そう思いこんだ。京都市内は静かに安全運転して国道九号線から亀岡の清坂峠の登りにさしかかった。そこはヘアピンカーブが多く「このやろう！！」と興奮して猛スピードで走った。トラックではギリギリの速度だった。幾つめかの急カーブを曲がったとき後部の荷台がら「ゴトゴトゴト」と何かが転げるような音がした。「やったぞ！」僕はそのままカーブを急に曲がり続けた。すると「ゴトンゴトン」とまた音がした。「やっぱり・・・」少しして会社の駐車場に着いた。「失神しているか・・・頭を打って死んでる？・・・」恐る恐る荷台のドアを開けた。誰もいない。パレットが散乱していた。「えっ・・・」何故か正気に戻った。「妄想やんけ・・・アホくさ・・・」。

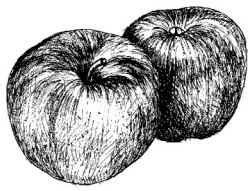
またある日、たまたまヘリコプターが飛んでいると、それに向かって軍隊のように敬礼をして「御苦労さまです！」と言いながらヘリコプターが見えなくなるまで見送っていた。と書きながら当時のおかしな自分を笑っています。

クレイビング

以前、高速道路のとあるパーキングエリアでトイレに行こうと思いトラックを降り時だった。「ちょっといいかな？」と見知らぬ男性に声をかけられた。その男性は自分の持っている黒いセカンドバッグをポンポンと叩きながら僕の目の前に差し出して、さらにこう言った。「関東からはるばる持ってきたんだけど、いらないかな？」僕はピンときた。「・・・ネタ屋や」そう気づくと同時に後頭部の髪の毛が逆立つような感覚にもなった。とっさに答えた「今日はいらない」所持金がなくきっぱり断った。それからトイレで用をたしながらふと思った。「なんで断ったんやろ？？金額交渉しても良かったんちゃうか・・・」そう考えながらも、そそくさとパーキングエリアから走り去った。きっぱり「いらない」と断っ



たものの黒いせセカンドバッグの中身にとらわれてしまった。「あの中にはきっとパケ（覚せい剤を小分けした物）が入っているんだ」「次の出口でＵターンして行って、やっぱり売ってもらおうか・・・」そういう考えが僕の頭の中を駆け巡り続けた。その日は「こんな事は誰にも言えない」のでアルコールを飲んで忘れようとした。それから数日は仕事にうちこみＮＡにも参加せずアルコールを飲んでやり過ごした。



仕事はトラックの運転で一人の時間が多く、たまに話相手がいても「この間ネタ屋に遭遇した」とはミーティングや仲間以外の人には絶対に話できない。次第に誰にもどうにもできない薬の渇望に膨れ上がっていった。この育ってしまったクレイビングによって給料日に何のためらいもなく薬を使ったのだと今は思う。

人間の脳には報酬と快感の中枢がある。そこは何かを気持ちよく感じたことを覚えている部分だ。僕のように薬物乱用する者の脳における働きは、食物やセックス、遊び、慈しみなどを楽しむときに機能する報酬系をハイジャックしたり盗み取ったりすることだ。乱用薬物によって常時刺激され続けていると、脳は薬物なしではいかなる快感をも得ることができなくなってしまうのだ。またこの報酬の中枢となる部分は思考や記憶といった部位と直接つながっている。映像として目で見た物、耳で聞いた音楽などでクレイビングに至るきっかけになることが多い。

僕の場合、阪神高速の東大阪線を車で走るだけで薬物を使いたくなる。というのは数年間そこを車で走って薬物の入手をしていたからだ。

当時の僕はクレイビングに至るきっかけが生活の中に数多くある事を全く知らなかった。

ターニングポイント

名古屋までの直行定期便で荷物を運ぶアルバイトは続いていた。その日はいつもの４ｔトラックではなく２ｔ車で枚方に荷物を届けてから名古屋に行く。そう指示を受けた。そしてその通りトラックを走らせた。枚方で荷物を降ろし国道一号線を京都方面に走りだした。

その時「そうや、大阪ダルクは高槻や」何気なく脳裏に浮かんだ。時計を見ると少し時間に余裕がある。「トラックも今日は小さいから大阪ダルクに寄ってみよう」と進路を少し変えて高槻に向けた。

ダルクに行くと「仲間が来たからミーティングができる」と当時一人だけ通所していた仲間がニッコリ笑って出迎えてくれた。が「ごめん、今、仕事の途中でこれから名古屋まで荷物もっていくねん」と僕は言った。なんだかすごく申し訳ない気持ちになった。それと「ここに居たい」そんな気持ちにもなった。ほんの十五分もいただろうか「それじゃあ行きます」と部屋を出ようとしたら「今度・・・姫路でフォーラムあるから・・・」当時の職員のビリーさんがぶっきらぼうに声を掛けてくれた。「また連絡します」と言ってトラックに戻った。

それからは姫路でのフォーラムが気になった。「ようし、仕事を休んで参加しよう」そう決めた。

つづく

二〇〇〇年十二月十二日　第三種郵便物認可　毎日発行

Right for Recovery

フリーダム

■あなたもご入会ください。

・会費でフリーダムの活動を支えてください。誰もが利用できるように、フリーダムでは無償で次のようなサービスを提供しています。

薬物依存に苦しむ人や家族のサポート
拘置所にいる薬物依存症者への面会、治療導入
薬物依存に関する研修や研究

会費　Ａ36000円　Ｂ24000円　Ｃ12000円　Ｄ随意の額
法人・団体　一口20000円

■寄付

フリーダムには公的な支援はまったくありません。
フリーダムの活動を支えるために寄付・カンパをお願いします。

■ボランティアスタッフとして運営や活動にかかわってください。

発行人　関西障害者定期刊行物協会　大阪市城東区東中浜２－１０－１３ 緑橋グリーンハイツ
編集人　フリーダム　谷口伊三美 isami.taniguchi@nifty.ne.jp
大阪市東淀川区下新庄２丁目４番６号　０６－６３２０－１４６３
頒価　1部３５０円
薬物電話相談　０６－６３２０－１１９６（土曜日午後３時～７時）
寄付・会費は同封の振替用紙を利用いただくか、下記の口座へ
三井住友銀行　西田辺支店　　普通：６７３９５１２
フリーダム　理事長　山本眞（フリーダム　リジチョウ　ヤマモトマコト）